

ユラニー、ヨブ論争について

田 島 俊 郎

Sur la Querelle d'Uranie et de Job

Toshiro TAJIMA

Résumé

Au milieu du dix-septième siècle, entre les deux phases de la Fronde, il y eut une querelle littéraire connue sous le nom de *la querelle d'Uranie et de Job*. On fit rivaliser *Job*, un sonnet récemment écrit par Isaac Benserade avec *Uranie*, considérée depuis longtemps comme modèle de la poésie galante.

Malgré ou à cause de la crise politique, beaucoup se lancèrent dans le débat. Non seulement des gens de lettres mais aussi des princes et des nobles écrivirent pour ces sonnets. Nous y trouvons ceux qui étaient pour Benserade, ceux qui étaient pour Voiture et ceux qui ne disaient pas leur préférence. Ils y voyaient une guerre civile terminée récemment. Ils craignaient qu'elle reprenne, et nous savons que leur crainte se réalisa.

C'est Guez de Balzac qui mit fin au débat ; il rédigea une longue dissertation. Cet épistolier n'aimait pas Voiture, donc il y critiqua surtout *Uranie*. Néanmoins cette dissertation n'aboutit pas à la conclusion. La Fronde recommencée en janvier 1650 n'aurait pas donné à Balzac le temps de l'achever. Mais à cause de sa longueur et de la renommée de son auteur, la querelle sera retenue dans les mémoires sous l'influence de Balzac.

はじめに

文学史の中でユラニー、ヨブ論争への言及をたびたび見かける。例えば Beaumaruchais 編の *Dictionnaire des littératures de la langue française* の sonnet の項には「(17世紀前半のソネットのうち) いくつかの作品は輝かしい成功を収め、才人たちは『ヨブ』と『ユラニー』、あるいはヴォワチュールの『朝の美女』について果てしない論争に没頭した」とある。Roger Duchène は *Dictionnaire universel des littératures* の Voiture の項で「1649年12月以降、貴顕の間で争いが持ち上がった、最近書かれたバンスラードのヨブがこの時までみやびな詩の不動の傑作と考えられてきたユラニーを超えたかどうかというものである」と述べる。Lagarde et Micharde は、「この詩に関する論争はヴォワチュールの死後、すなわち1648年から1650年にかけて起きた。この作品に対して、ヴォワチュールの衣鉢を継ごうとしていたバンスラード (Issac de Benserade) の作品『ヨブ』が対抗させられた。二つの陣営が形成された、ロングヴィル公爵夫人 (Anne-Geneviève de Longueville) に率いられた Uranistes と、夫人の弟コンチ大公 (Armand de Bourbon, prince de Conti) の下に集まった Jobelins である。最も有名な闘士はサラザン (Jean-François Sarasin)、スキュデリー兄弟 (Georges et Madeleine de Scudéry)、シャプラン (Jean Chapelain)、デマレ・ド・サン＝ソルラン (Jean Desmarets de Saint-Sorlin) それにゲ・ド・バルザック (Jean-Louis Guez de Balzac) であった。バルザックはこの論争のために20枚もの論文を物した。コルネイユ (Pierre Corneille) は思慮深く引っ込んで、ノルマンディ風に旗幟を鮮明にしなかった。」(Lagarde & Michard, p. 63.) と述べている。

これらは一般的な文学事典、教科書なので言及しても詳細に立ち入る余裕はないのだろう。しかし17世紀文学の専門的な著作でも詳細は語られない。Antoine Adam は、『17世紀フランス文学史』では、本文ではなく注で、ロングヴィル公爵夫人だけがヴォワチュールを支持したこと、この論争の時期が1649年の12月であること、を述べるが、論争の詳細は述べない¹⁾。また Adam が注を付した *Historiettes* の中でもこの論争の書誌を Magne に譲り、経過を再録してくれない²⁾。もっとも詳しいのは Génomiot である。Génomiot は注4に引

1) Adam, *Histoire*, II, p. 38. note 1、同じく Adam, *Littérature française*, p. 206. et p. 209. 参照。

2) *Historiettes*, I, p. 808. 参照。

く Mennung に多くを負っている³⁾。

ヴォワチュールに関してもっとも詳細な伝記を書いている Emile Magne も、ヴォワチュールの死後に起きたこの論争について多くは語らない。「(『ユラニー』が執筆されてから) ずっとたって、バンスラードのソネと対置させられてこの詩は『ヨブ』と『ユラニー』争い」の名で知られる筆戦を引き起こしたことは周知である。この争いの日付は1648年の末、ヴォワチュールの死の直後に置くべきだろう。」⁴⁾

ヴォワチュールの編者も多くを教えてはくれない。Ubicini は「ヴォワチュールとバンスラードのソネが、ロングヴィル夫人のきっぱりとした支持が秤を傾かせるまで、宮廷と市中、サロン、アカデミーを二分した」(Ubicini, II, p. 310.) と述べるだけである。ヴォワチュールの最も新しい版の編者である Henri Lafay も Magne の書誌を紹介するだけである⁵⁾。

これらの乏しい記述から経過を想像すると次のようになるだろう。

バンスラードは1648年夏、この詩をブレジ伯爵夫人 (Charlotte Saumaise de Chazan, comtesse de Bregy ou Bregis) に捧げた。みやびさ (ギャラントリー) の程度で『ユラニー』を超えたかと評判を呼んだバンスラードの作品に対して、ロングヴィル公爵夫人が『ユラニー』を擁護した。議論はロングヴィル公爵家のサロンで戦わされ、サロンの人士が争った。歌合わせに勝ったのがどちらかはっきりしない。またこの論争の日付もはっきりしない。Magne はヴォワチュールの死(1648年5月26日)のすぐ後とし、1648年末と考えている⁶⁾。Raymond Picard は1648-49年として日付けを限定していない⁷⁾。Couton はコ

3) Génétiot, p. 196-200. 参照。

4) Magne はいずれも不完全だと評するのだが、この論争に関する詳細な研究がない訳ではない。

Sallengre (A-H, de), 《Histoire de la guerre des Uranins et des Jobelins》, *Mémoire de Littérature*, I, La Haye, 1715, p. 116-134.

Beupaire (Eugenie de Robillard de) Beupaire, 《Histoire de deux sonnets》, *Congrès scientifiques*, XV, Tours, 1847, vol. II, p. 386-426.

Mennung (Albert), *Der Sonnettenstreit und seine Quellen. Ein litterarische Episode aus des Tagen des Preziosentums*, *Zeitschrift für französische Sprache und Literatur*, XXIV, 1902, pp. 279-356.

がある。Magne, p. 33, note 1. 参照。

5) *Poésies*, édition critique publiée par Henri Lafay, p. 67. 参照。

6) Magne, I. p. 30. 参照。

ルネイユのソンの執筆の日付けを Rueil の和議（1649年3月11日）からコンデ大公らの逮捕（1650年1月18日）の間とする⁸⁾。Adam は Arsenal に保存されているある文書の日付けから1649年の12月とする⁹⁾。Lafay は Adam に従って論争の時期を1649年12月としている。Génetiot は1648年の夏に置く。

議論が白熱した原因として Adam はコンデ大公への反感がこの論争の原因であると述べている。「ある手稿への注によって、このソンをめぐる論争の時期を正確に同定できる。ロングヴィル公爵夫人はランブイエ邸をたびたび訪れていた。ヴォワチュールのソンに対して非常な感嘆を表明した。Palatine 大公夫人（Anne de Gonzague）がバンスラードが書いたばかりの *Job* を対抗させた。韻文や散文の意見が飛び交った。ロングヴィル公爵夫人だけがヴォワチュールの側に残った。1649年の12月という日付と若いコンデ大公がかき立てていた敵意がこの論争の説明となるかもしれない。」（Adam, *Littérature française, L'Age classique I, 1624-1660*, p. 206.）

バンスラードは忘れられた詩人だし¹⁰⁾、ヴォワチュールも特に記憶されているわけではない。したがってこのエピソードについて文学史の大きなページを割くには及ばないかもしれない。だが、同時代の証言・資料の紹介や説明がないのはどういう訳だろう。そこでわれわれなりに手に入る資料でこの論争の意味を類推してみたい。ヴォワチュールは亡くなって久しく死後1年半もたっている。フロンドの混乱の中で、なぜ20年以上前に書かれた旧作についての論争が持ち上がったのか。この論争について書かれたテキストを介して時代の精神とソンをめぐる美意識を探ることがわれわれの目的である。

同時代の資料について

まず関係する資料について述べる。われわれが持っている資料は、ヴォワチュールとバンスラードの二つのソンの、派生的に書かれた詩作品、いくつかの書簡、そしてバルザックの論文である。

『ユラニー』は、バルザックの証言によれば1620年代に書かれた。制作当初からバルザックやマレルブに評価されたが、1650年まで印刷されてはいない。ヴォワチュールは生前に作品をほとんど公刊していない。死後すぐに甥のパン

7) Picard, p. 198. 参照。

8) Corneilles, p. 1617. 参照。

9) *Historiettes*, I, p. 808. 参照。

シェーヌ (Martin Pinchène) によって作品集の刊行が準備され、1650年に出版される。『ユラニー』もこの作品集に収められた。

バンスラードの作品については、初出の情報は揺れている。Lachèvreによれば、「有名な『ヨブ』の初出を145ページの注4では *Les Paraphrases sur les neuf leçons de Job (de Benserade)*, Paris, 1638, in-12. だとしたが、この断言は正確ではない。Victor Fournelによれば、1647年に先の *Paraphrases* の (多分1647年の再刷) に添えて、ある奥方に送られたものであろう。相方の詩『ユラニー』は、1620年にさかのぼるか? いずれにせよ問題の二つのソネットはそれぞれ以下のように初めて印刷されたようである。バンスラードの作品は1652年の『Chamhoufryの詩選 (*Recueil de Chamhoufry*)』、第2巻に、ヴォワチュールの作品は1650年の『作品集』で。しばらく前からサロンで流通していたことは確かだろう。」(Lachèvre, tome II, p. 657.)

サロンの中の会話は記録する人がいなければ窺うべくもない。しかし幸い議論の一部はソネットやエピグラム形でやり取りされ、それらは1653年に出版された *Recueil de Sercy* の第1集初版に記録されている。17世紀においては、低料金で原稿を集める手段として、手稿あるいはすでに印刷されている小品を1巻にまとめる方法が取られた。1652年にシャンウードリイ (Chamhoudry) が

10) Isaac de Benserade は1612年もしくは1613年生まれ。詩人としてよりもリュリイによるバレエの台本作家として宮廷バレエの大御所として名をなす。後年宮廷リュリイと協力してルイ14世にバレエを踊らせる。長命で、1691年に亡くなる。ヴォワチュールとの関わりはこの『ユラニー』が最初ではない。ヴォワチュールがモンモランシーの乱でブリュッセルに亡命していた1634年前後ランブイエ邸に出入りしはじめ、ジュリー・ダンジェンヌのお気に入りというヴォワチュールの地位を脅かすかに思われたことがある。ヴォワチュールはブリュッセルからそれを危惧する手紙をランブイエ嬢宛て送っている。

「あなたが私より好きだとおっしゃるアベンセラージュ (Abencerage) たちというのが誰だかわかりませんが、彼らとて私もそうでないようにグレナダ生まれではないでしょう。彼らが私に対して持っている唯一の有利な点はあなたの傍にいてということで、私のあらゆる罪はそこから遠ざかっていることでしょう。」(第79通目, Ubicini, I, p. 240.)

アベンセラージュとはグレナダ生まれの伝説的なイスラムの英雄だが、この手紙ではバンスラードの別称である。ランブイエ邸でバンスラードにアベンセラージュのあだ名がつけられたのは、この前年ヴォワチュール自身がスペインのグレナダでアベンセラージュの旧居を訪ねたと報告しているのだから、それを承けているのだろう。

詩選を発刊しはじめ、非常な成功を収める。それにならってセルシー (Charles de Sercy) が1653年にコルネイユなどの詩を集めて刊行する。この詩選は成功し、セルシーは1660年までに5巻の選集を発行する。これらを総称して *recueils de Sercy* と称する¹¹⁾。この論争の多くは、1653年の Sercy の選集に収められている。書誌情報は以下の通りである。

Premier Recueil de Sercy (vers) Première partie. première édition. -*Poésies choisies de Messieurs Corneille, Bensserade, de Scudéry, Boisrobert, Sarrasin, Desmarets, Bertaud, S. Laurent, Colletet, La Mesnardière, de Montereuil, Vignier, Chevreau, Malleville, Tristan, Testu-Mauroy, de Prade, Girard, de l'Agé. Et plusieurs autres.* A Paris, chez Charles de Sercy, au Palais, dans la Salle de Dauphine, à la Bonne-Foy couronnée. MDCLIII. avec Privilège du Roy, in-12 (Lachèvre, II, p. 53.)

この選集には241点が収められている。内238点が初出。128点が署名もしくは頭文字付き、113点が無名だが、そのうち50点については Lachèvre は作者を同定できるとする。したがって作者不詳は63点。Lachèvre の書誌から論争に関わると判断できるものは右の通り。作者名、題名と incipit を示す。本論で検討したものについては題名に* (アステリスク) を付している。

まずは Sercy による刊行の辞を聞こう。

「編者から読者諸氏へ

以下の全作品を一堂にまとめようとした私の配慮は読者諸氏にとっては不都合ではないでしょう。全宮廷が『ユラニー』好みと (この作品を先に置くのは誕生順ですが)、『ヨブ』好みに別れたのですから、高名な方や身分ある方、有徳の方などがこの件について漏らされた様々の意見を見ることでご満足いただけますでしょう。この争いは大きく鳴り響いたのですから、論争が引き起こした全く巧妙な様々な意見は、二つの詩双方の栄光を高めるためにほとんど役に立たないなんてことはありません。この二つの詩をこの集に収めていないのは、それらが非常に普通に見かけるものであって、いろんなところで白日に置かれているために、それを知らないあるいは見たことがないという人はいないほどだからです。」(Recueils de Sercy, p. 374. cité par Lachèvre, II, p. 55., Picard, p. 198.)

11) Adam, *Histoire*, II, p. 53-54., Adam, *Littérature française*, p. 131., Corneille, p. 1612. note de Georges Couton 参照。

作者名	作品名	Incipit
Bertaut	Le jugement de Job et d'Uranie. Comédie	Madame, deux sonnets demandent à vous voir
Brégy	Epig. sur les sonnets de Job et d'Uranie*	L'un se picque pour Job, l'autre pour Uranie
Chapelain	A Mme de Longueville. Sonnet	Job frappé d'une playe horrible
Chevreau	Sur les deux sonnets de Job et d'Uranie. St. et faveux de Job.	C'est en fait, Uranie, il faut rendre les armes
id.	Madrigal sur le sonnet de Job	Icy d'une immortelle et funeste couleur
Conti, (Prince de)	Jugement sur les deux sonnets de Job et d'Uranie (sig. P. de C.)*	Ces deux sonnets n'ont rien de comparable :
Corneille (Pierre)	Epig.*	Amy, veux-tu scavoit, touchant ces deux Sonnets
id.	Sur les sonnets d'Uranie et de Job. Sonnet*	Demeurez en ropos, Frondeurs et Mazarins
id.	Sonnet*	Deux sonnets partagent la Ville
Desmarests de Saint-Sorlin	A Mad. de Longueville (sur les sonnets de Job et d'Uranie.) St.	Que vostre jugement est net !
Girard (ou Le Bret)	(Sur les sonnet de Job et d'Uranie). Sonnet*	Tandis que la Cour se partage
La Folaine	A Mad. de Pons, sur les sonnets d'Uranie et de Job. Madrigal.	Par un trait généreux d'une pure amitié
L'Age, Lager	(Sur les Sonnets de Job et d'Uranie) Sonnet*	Hélas, de quoy s'avise-t-on (signé de L'age)
id.	(Sur les Sonnets de Job et d'Uranie) Sonnet	Job qui de son bonheur vit la terre étonnee (si L'age)
La Mesnardière	Pour Mad. la Princesse Palatine favorable a Job. Contre Mad. de Longueville	Il craint avec raison ce Héros glorieux
id.	A Mad. de Longueville. St.	Job vous cause bien du soucy
Montauzier (C. de)	A Mme de Longueville (Epig. sur le sonnet de Job)	Par quelle bizarre aventure
id.	Epig. Id.	Permettez, Princesse adorable
Sarasin	Glose sur le Sonnet de Benserade a M. Esprit*	Monsieur Esprit, de l'Oratoire,
Scudery (G. de)	A Mad. de Longueville,	Job perdit enfants et troupeaux
Scudery (Mlle de)	Sur le sonnet de Job, quatrain.	A vous dire la verite
Testu (Jacques)	Le Pulmonique. St.	Puisque vous le voulez, il faut rombre mes fers
id.	Sonnet.	Si j'en dois croire tes discours
Vignier	A Mad. de Richelieu sur le sonnet de Job. Sonnet.	Illustre malheureux, de qui adversité
id.	Madrigal sur le sonnet de Job	Si Job de Benserade eut esté sans défauts
Anonyme	epigramme*	Il n'en faut ma foi plus parler,
Anonyme		Job se lasse d'estre si doux

他に Ubcini がヴォワチュールの版本に付した注の中で引用する未刊のマドリガル (Ubcini, II, p. 310.)。ロングヴィル公爵夫人からエスプリ (Jacques Esprit) あての書簡。(Picard, p. 212.)

スキュデリー嬢からシャプランあてた1649年12月7日付けの書簡。(Picard, p. 211., <http://erc.lib.umn.edu/dynaweb/french/ScudLett/>にもある。) Antoine Halley から Aubert という人物に宛てた1649年12月25日付けの書簡。(Picard, p. 212.)

さらにバルザックの論文《Remarques sur les deux sonnets d'Uranie, et de Job. Dissertation VI》(Balzac, II, p. 580-594.) がある。タルマン・デ・レオもこの論争について言及するが、バルザックの論文を引用する形で『ユラニー』の誕生について語るだけである。(Historiettes, I, p. 124 et II, p. 48.)

『ユラニー』と『ヨブ』

作品を見よう。まずはわれわれにとってはすでに親しい『ユラニー』から。

Uranie

Il faut finir mes jours en l'amour d'Uranie,
L'absence ni le temps n'en sauraient guérir,
Et je ne vois plus rien qui me pût secourir,
Ni qui sût rappeler ma liberté bannie.

Dès longtemps je connais sa rigueur infinie,
Mais pensant aux beautés pour qui je dois périr,
Je bénis mon martyre, et content de mourir,
Je n'ose murmurer contre sa tyrannie.
Quelques fois ma raison, par de faibles discours,
M'incite à la révolte, et me promet secours,
Mais lorsqu' à mon besoin je me veux servir d'elle ;

Après beaucoup de peine, et d'efforts impuissants,
Elle dit qu'Uranie est seule aimable et belle,
Et m'y rengage plus que ne font tous mes sens.

(Lagarde et Michard, p. 63.)¹²⁾

「私の命はユラニーへの愛の内に終えねばなりません。不在も時も私を癒せず、私を救い、私の自由を取り戻しうるものはもはや何も見えないのです。ずっと以前から、かの方の限りのない厳しさを知ってはいても、身を滅ぼすに値する美しさを思えば、私は私の殉難を称え、死を喜び、かの方の専制に恨みは述べはしません。

時に、私の理性が、その弱々しい弁論で私を反抗に誘い、私の救済を約束します。ところが私が必要に際し、理性を使おうとする時、多大な苦しみと、無益な労苦の後、私の理性は言う、ユラニーは独り愛らしく、美しいと。そして私のあらゆる官能がなし得ないほどに私をかの方に結びつけるのです。」

次にバンスラード。

Sur Job

Job, de mille tourments atteint,
Vous rendra sa douleur connue,
Et raisonnablement il craint
Que vous n'en soyez point emue.

Vous verrez sa misère nue :
Il s'est lui-meme ici dépeint.
Accoutumez-vous à la vue
D'un homme qui souffre et se plaint.

Bien qu'il eut d'extrêmes souffrances
On voit aller des patiences
Plus loin que la sienne n'alla.

S'il souffrit des maux incroyables,
Il s'en pleignit, il en parla ;
J'en connais de plus misérable.
(Lagarde et Michard, p. 63.)

12) 様々な版に採録されるが、最も手に入りやすいと思われる版のページを示す。

「ヨブについて

千もの苦難にあったヨブは、あなたに自らの苦しみを知らしめましょう。でも正しくも、危惧するのです、あなたは心を動かされまいと。

あなたはあの裸の苦痛をご覧になりましょう。そこに自らの姿を描いたのです。ご覧になることにお慣れください、苦しみ嘆く男を。

ヨブは極度の苦しみを味わいますが、自分のそれより先まで続く忍耐を見かけます。

信じがたい痛みを苦しんでいても、ヨブは嘆き、語るのです。私のものよりみじめなそれを知っている、と。」

ヴォワチュールの詩は自明だろう。愛する相手の冷たさに対して詩人の理性は愛を全うさせることの不可能を詩人に示唆し、愛をあきらめるように勧めるのだが、理性は非力で、官能（感覚）以上に詩人を愛の対象に結びつける結果となる。プラトニックな女性を崇拜と殉教、自分を受け入れてくれない（あるいは不在の）相手に向かって不可能な愛を語るペトラルカ的な状況は、ヴォワチュールにとってはジュリー・ダンジェンヌとの関係として書簡の中で何度も繰り返される。この詩はバルザックの証言によれば、1620年代、つまりジュリーがヴォワチュールの書簡の相手として登場する1630年代よりも前に書かれたのだが、これから書かれるべきジュリーへの書簡で繰り返されるテーマを予見していると言えるだろう。¹³⁾

対してバンスラードの詩はいささかわかりにくい。ヨブとは旧約聖書の『ヨブ記』の主人公である。ヨブは裕福な篤信家であり、多くの家畜と七人の息子と三人の娘を持っていた。神が悪魔にヨブの正しさを自慢したのに対し、悪魔はそれは裕福さ故であって富を失えば神を呪うだろうと答える。そこで神は悪魔との賭けによってヨブから富と子供と健康を奪う。妻は神を呪うようにすすめるが、ヨブの信念は揺るがない。三人の友人が訪れてヨブの信念を揺るがすような問いかけをするがヨブの信念は相変わらず揺るがない。終いには神が直接声をかけ、ヨブの富を倍にして返し、新たに十人の子供を授けた。ヨブのテーマは古くから文学テーマとして好まれた。神秘劇で取り扱われ、信仰の堅さを讃えた。また16世紀以降はヨブのストイシズムが前面に出てくる。¹⁴⁾

13) ジュリーへの手紙については、田島「ジュリーへの手紙 —ヴォワチュールの反語—」参照。

14) 文学的神話としてのヨブの分析は、Brunel に詳しい。

この詩の大部分は「あなた (vous)」への呼びかけである。ヨブに試練を与え、苦しみに心を動かされない「あなた」とは神に等しい存在である。10～11行目でヨブを凌駕する忍耐を予見するが、それは14行目で「あなた」の崇拜者の忍耐だと暗示される。いずれも片恋の苦しみを被虐的に表現する。苦悩の表現の引き合いに出されるのが『ユラニー』では殉教であり、暴君であり、『ヨブ』では旧約聖書のヨブ苦痛と忍耐のイメージである。ユラニーとヨブは同じ役割を担っているのではない。ユラニーは詩人の愛の対象であり苦悩の原因であるが、ヨブは詩人の苦悩を際立たせるための極度の苦勞の例示である。ヴォワチュールでは愛の対象は明示され、苦しむのは愛のためであるということは第1行から明白であるが、バンスラードでは最終行まで読まなければ何がヨブの痛み何に喩えられているのかわからない。

さて、これらのどちらが優れた作品であるか、どちらが時代の好みかという問いかけはわれわれには無意味である。時代の文脈と感性からずれてしまったわれわれに見極めはつかない。時代の当事者達の意見を聞いてみよう。

論争

Sercy の詩選に収められた詩歌やその他書簡は、大きく4つに分類できよう。すなわち1) 二つの詩それぞれの価値を対比させて論じるもの、2) 宮廷やサロンが二分されることへの危惧を語るもの、3) ユラニーを支持するもの、4) ヨブに軍配を上げるもの、である。それぞれを見ていこう。

1) 対比

コンチ大公 (Armand de Bourbon, prince de Conti) の手になると推定される4行詩。

Jugement sur les deux sonnets de Job et d'Uranie (sig. P. de C.)

Ces deux sonnets n'ont rien de comparable :

Pour en parler bien nettement,

Le grand est le plus admirable,

Le petit est le plus galant.

(Picard, p. 201.)

「ヨブとユラニー、二つのソネット判定 (署名 P. de C.)

この二つのソネットに比肩するものなし。率直に言えば、長い方は驚嘆すべきだし、短い方はみやびである。」

ジュールダン氏が発見したように、散文でないものは韻文なのだから、これも詩選に収められる資格はあるのだろうが、あいにく何らの詩的感興も引き起こしはしない。コンチ大公はヨブ派 (jobelin) の総帥として名を挙げられるのだが、この詩を見る限りではどちらかに傾くわけではない。grand/petit の対立は価値判断ではなく単に二つのソネットの各行の長さで区別しているだけ。したがって12音綴の『ユラニー』は grand で admirable なのに対し、8音綴の『ヨブ』は petit で galant と判定する。ただこの admirable と galant の二つの形容詞はいずれが優れているのだろう。

コルネイユ (Pierre Corneille) は二つのソネットと一つの風刺詩を残している。その風刺詩の中では、『ユラニー』、『ヨブ』両者の特質を並べる。

Epigramme

Ami, veux-tu savoir, touchant ces deux Sonnets
 Qui partagent nos Cabinets,
 Ce qu'on peut dire avec justice?
 L'un nous fait voir plus art, et l'autre un feu plus vif ;
 L'un est le mieux peigné l'autre est le plus naïf ;
 L'un sent un long effort, l'autre un prompt caprice ;
 Enfin l'un est mieux fait, et l'autre est plus joli ;
 Et pour te dire tout en somme,
 L'un part d'un auteur plus poli,
 Et l'autre d'un plus galant homme.
 (Picard, p. 206, Corneille, p. 1191.)

「風刺詩

友よ、君は知りたいか、我らが書斎を二分しているこれら二つのソネットについて、公正に言えることがらを。

一方はより多くの腕前を、他方はより生き生きとした炎を見せてくれる。

一方はよりうまく描き上げられているが、他方はより素朴だ。

一方は長い努力を、他方は素早い気まぐれを感じさせる。

結局一方は良くできていて、他方はより美しい。
 つまりは君に申し上げるなら、
 一方はより礼儀を心得た作者から、他方はよりみやびな人から発する。」

コルネイユは技巧と自然を対比させる。一方に art, mieux peigné, long effort などの形容で技巧と長い努力による推敲の冴えを持つ礼儀正しい (poli) 詩人を想定し、他方に feu plus vif, naïf, prompt carprice などの形容で即興的に美しいものを作り出すみやびな (galant) 人物を想定する。さてどちらがどちらなのだろう。直前に書かれた作品あるいは会話の中のことばを踏まえながら論争は進んでいたのだから、一度片方に与えられた形容詞はそう簡単に反対陣営に移されなかったのではなかろうか。コンチ大公はバンスラードに「みやび (galant)」の形容詞を与えており、ヴォワチュールについては技巧を、バンスラードについては自然さを評価すると考えられようか。

コルネイユやコンチ大公はどちらを好むとも明確にしないのではあるが、二つのソンの違いは語る。しかし中には判断停止に陥るものもある。

Sonnet

Tandis que la Cour se partage,
 Et que l'on y voit les plus fins,
 Les uns faire des Jobelins
 Le pitoyable personnage,

Les autres tirer avantage
 Du vain titre des Uranins,
 Je cède à tant d'esprit divins
 L'honneur des donner leur suffrage.

Mais lorsque je songe à ta soeur,
 Et que je trouve sa rigueur
 Ainsi que sa grâce infinie,

Cher ami, je ne vois que trop
 Qu'elle est plus belle qu'Uranie,
 Et moi plus malheureux que Job.

(Picard, p. 209.)

「ソネ

宮廷は二分され、もっとも繊細な方々が、あちらはヨブ派から、最も哀れな人物を作り上げ、

またこちらはユラニー派の虚しい名前から利益を引き出すのが見えるのです。私はこれらの神々しい才に譲りましょう、判定を下す栄誉を。

でも君の姉を思い浮かべ、その厳しさを、その果てしない優美と共に気づくとき

友よ、彼女はユラニーよりも美しく、そしてわたしはヨブよりも不幸なのだ、とあまりに思わずにはいられない。」

この詩は1653年5月の Sercy の第1集初版では Girard との署名がある。Girard はパリの高等法院の弁護士。再版では Le Bret の署名がある。Le Bret が正しいのだろう。Henri Le Bret はシラノ・ド・ベルジュラックの友人で歴史に関する著述を何冊か残している人物。

判定を下す栄誉はもっと立派な才能に譲ろうというのだが、実はこの論争にことよせて友人の姉妹に言い寄ろうとする。相手はユラニーよりも美しく、相手にされていない自分はヨブよりも不幸だと。

2) 二分されるサロン

論争に加わった人たちにはつい最近終息したフロンドの内戦が再開されることへの危惧が脳裏から離れなかった。たとえ文芸上の遊びとはいえ、宮廷が二つの陣営に分かれて議論を戦わす状況は最近まで続いたフロンドの混乱を思い出させるのだろう。宮廷を二分する状況そのものに懸念を表明する作品が少ない。まずコルネイユから。

コルネイユはソネを2点残している。

Sonnet

Deux sonnets partagent la Ville,
Deux sonnets partagent la Cour,
Et semblent vouloir à leur tour
Rallumer la guerre Civile.

Le plus sot et le plus habile
 En mettent leur avis au jour,
 Et ce qu'on a pour eux d'amour
 A plus d'échauffe la bile.

Chacun en parle hautement
 Suivant son petit jugement ;
 Et s'il y faut mêler le nôtre,

L'un est sans doute mieux rêvé,
 Mieux conduit, mieux achevé,
 Mais je voudrais avoir fait l'autre.
 (Picard, p. 206., Corneille, II, p. 1191.)

「ソネ

二つのソネが町を二分し、二つのソネが宮廷を二分し、次は自分の番と、内戦に火をつけようとしているかのよう。

愚か者も利口者も、私見を開陳し、それらに対して愛着を持っているものが、一人ならず怒らせる。

みな声高に語る、おのがちっぽけな判断に従って、もしわれわれのも混ぜねばならぬなら、

一方が良く構想されているし、良くまとまっている、完成度も高い、しかし私としては別の方を書きたかったな。」

どちらともつかない一つの詩の特質を「良く構想されているし、良くまとまっている、完成度も高い」と並べ上げておきながら、「しかし自分としては別の方を書きたかった」とどっちつかずの結論を下す。われわれには、10行目までの論争の過熱ぶりへの冷ややかな視線のほうが興味深い。コルネイユにとって、議論の参加者を愚か者であったり利口者であったりするのだが、いずれにせよその判断はちっぽけなものでしかないようだ。

もう一つのソネ

Sur la contestation entre le sonnet d'Uranie et de Job

Demeurez en repos, Frondeurs et Mazarins,
 Vous ne méritez pas de partager la France ;
 Laissez-en tout l'honneur aux partis d'importance
 Qui mettent sur les rangs de plus nobles mutins.

Nos Uranins ligués contre nos Jobelins
 Portent bien au combat une autre véhémence ;
 Et s'il doit s'achever de même qu'il commence,
 Ce sont Guelfes nouveaux, et nouveaux Gibelins.

Vaine démangeaison de la guerre Civile,
 Qui partagiez naguère et la Cour et la Ville,
 Et dont la paix éteint les cuisantes ardeurs,

Que vous avez de peine à demeurer oisive !
 Puisqu'au même moment qu'on voit bas les Frondeurs
 Pour deux méchants Sonnets, on demande, qui vive?
 (Picard, p. 205. , Corneille, p. 1190.)

『『ユラニー』対『ヨブ』のソンの訴訟に関して

フロンド派よマザラン派よお休みなさい。あなた方はフランスを二分するには値しないのです。その榮譽は、より高貴な反乱者の列に身を置く重要な党派に譲りなさい。

われらが『ユラニー』派は『ヨブ』派に抗って同盟し、闘いに別の激烈さをもたらし、始まりに適う結末が必要だとすれば、彼らは新しい教皇派(ゲルフ)であり、新しい皇帝派(ギブラン)なのです。

先に宮廷や街角を二分した内戦へのくだらない渴望、和議は焼け付くような熱さの中で消滅してしまった。

怠惰に過ごすことにあなたは耐えられないのですね。フロンド派が破れてしまったのを知ったまさにこの時、二つのつまらない詩のために尋ねるのですね、どちらが生き残るのか、と。」

ここでコルネイユは、争いをフロンド派對マザラン派、さらにイタリア中世の教皇派(ゲルフ) 皇帝派(ギベリン)に喩える¹⁵⁾。フランスを二分するだけ

の価値がなかったフロンド派とマザラン派の内戦を再発させる新たな争いの種を「つまらない詩 (méchant Sonnets)」と吐き捨てることばにコルネイユのいらだちが見えるか¹⁶⁾。

『ヨブ』を捧げられた本人であるブレジー伯爵夫人は、フロンドの混乱を思い出して、この議論によってフランスが再び二分されるのではないかと大げさにも懸念している。

Epigramme

L'un se pique pour Job, l'autre pour Uranie,
Et la Cour se partage en cette occasion :
Plut à Dieu, toute chose étant bien réunie,
Que la France n'eût point d'autre division.
(Picard, p. 207.)¹⁷⁾

「風刺詩」

一方は『ヨブ』に気分を害し、他方は『ユラニー』に。そして今回宮廷は二分される。すべては再統合されたのですから、フランスに新たな分割などなければ良いのですが。」

15) ヨブ派と訳してきた jobelin は一貫した形を保ち、定義もいくつかの辞書で確認できる。リトレによれば jobelin は、「17世紀においてバンスラードのソンをヴォワチュールの『ユラニー』より好んだ人々をいう」の語義を載せている。1680年の Richelet によると、jobelins についてコキュの意の他に「バンスラードの『ヨブ』のソンをヴォワチュールの『ユラニー』よりも高く評価した才人達をいう」の定義を与えている。Furetière, 1695年の Académie にはこれらの定義はない。これに対してユラニー派には uranien, uranin, uraniste の語があり、辞書への掲載もリトレが、uranien を、「17世紀においてヴォワチュールの『ユラニー』のソンをバンスラードの『ヨブ』より上位におく人達をいう」と定義しているのみである。jobelin という語自体はこの論争以前から存在したのだからコルネイユの造語ではないが、この語義ではこの例は初出に近いだろう。uranin は jobelin に対応した造語だろう。Mazarin や gibelin など類似した語尾の存在が jobelin の語が uranien, uraniste よりも安定して用いられることの原因だろう。

16) Corneille, p. 1617. note par Couton 参照。

17) Lachèvre は Bregy に帰しているが、Picard は無名としている。

この女性は *Dictionnaire des Précieux* を編纂した Saumaise の姪である。タルマン・デ・レオによる紹介がある¹⁸⁾。

ブレジー伯爵夫人の懸念は間もなく的中する。

もう1点無名氏の風刺詩では、和議は破れてヨブとユラニーを支持して戦わなければならない、と語る。

Epigramme

Il n'en faut ma foi plus parler,
La paix d'entre nous est bannie ;
Il faut partout se quereller
Ou pour Job ou pour Uranie.

On voit en divers sentiments
Les maîtresse et les amants,
Et les cousins et les cousines

Et les astres sont si malins,
Que les femmes sont uranines,
Et les maris sont jobelins.
(Lachèvre, II, p. 560. , Picard, p. 208. ,)

「風刺詩

もはや誓ってそれについてもう語るべきではないのです。私たちの和平は破られた。至る所で争うべきです、あるいはヨブのためあるいはユラニーのために。

想われ人と愛人が、従兄弟と従姉妹が異なる意見であるように思われます。星回りは意地悪で、妻がユラニー派なら、夫はヨブ派。

文芸上の争いであっても、家族や友人が戦いあう姿は、内戦の混乱を思い出させ、内戦の再発かと心配するのだろう。これらの詩のためにフロンドの休戦

18) *Historiettes*, II. 403-406. 参照。

は破られ、新たな内戦が始まった、と言う。

確かにコルネイユやブレジー夫人やこれらの詩人たちが心配したように、間もなくフランスと宮廷は再び二分される。もっとも原因はこの二つのソネではなかったけれど。

これらの詩が1649年の12月に書かれたとすると、新たな混乱の始まりまでにはたかだか1月ほどの平和しか残されていない。1650年1月18日、文芸論争でも政治でも主要人物であったコンデ大公、コンチ大公、ロングヴィル公爵はパレ＝ロワイヤルで身柄を拘束される。ロングヴィル公爵夫人は夫ロングヴィル公爵が地方官を勤めるノルマンディーに逃れ、ノルマンディーを蜂起させようとする。内戦は貴族のフロンドと呼ばれる新たな組み合わせで再発する。

3) Uranins

唯一人ヴォワチュールを支持したとされるロングヴィル公爵夫人は、エスプリ (Jacques Esprit) にあてた書簡で、『ヨブ』の詩の奥に隠された思いがみやびなものであったとしても、ヨブの悲惨さに対比しての描写では詩そのものが美しさを持ち得ない、と言う。

「7行目、8行目そして最終行を除いてヨブの他の行は、欠点のみならず、あなたが耐えることにお慣れにならないような事柄でいっぱいだと思います。というのはそれは胸の悪くなるような域にまで達する表現なのです。反してヴォワチュールの各行、少なくとも最後の6行の中では、最も美しく最も力強い表現が、確かに新奇さの優美は持ち合わせていないのですが、しかるべく情熱的である観念と結びつけられ、ヨブの各行にある単純で唯一の（利点である）繊細さには勝っているように思えるのです。確かにそれらの表現は私が全く見たことがないようなものと同じくらいみやびな雰囲気と合わせられていることは認めます。」(Picard, p. 212.)

エスプリはロングヴィル公爵夫人から保護を受け、年金を貰っていた。タルマン・デ・レオが伝えるところによると、エスプリはアカデミーに受け入れられたがほとんど何も知らず、旧約聖書の『詩編』の書き換えを書いたくらいで、それも凡庸なものだったという¹⁹⁾。われわれはエスプリ自身の意見を持っていないのだが、この手紙や後に引くサラザンの詩から想像するに、エスプリは口

19) *Historiettes*, II, p. 350. 参照。

ングヴィル夫人に抗してヨブ支持を表明していたのだろう。Mennung から引用する Picard は、この書簡の背景などは日付などを示してくれない。ただ、次に引くスキュデリー嬢の書簡がロングヴィル夫人の意見を踏まえたもののように思えるので、日付はそれに先行するのだろう。

スキュデリー嬢は、1649年12月7日付けシャプランあての書簡でロングヴィル公爵夫人支持を表明している。

「あなたが兄に寄越されました書簡の、訴訟が持ち上がっている二つのソネについての私の考えを知らせるようにとあなたがお望みだとお書きになった個所を、私には過ぎた栄誉を与えて下さっているのだとは信じられず、2度読みました。でもあなたに従おうと決心して、遠慮もなく、ユラニーのソネの方がもう一方より遥かに気に入ったのだと申し上げますでしょう。それにこの組み合わせにいらだっていることをとお疑いになりませんように。だって私のようなものがロングヴィル公爵夫人のように聡明な大公妃がお考えになったことを私も考えつくなんて、その方に迷惑をかけると思うからです。ですから私が率直に申し上げるのだと信じていただけますように。ヨブのソネのは、こんな言い方が許されますならば、何かきれいで繊細なものを持っています。でもそれを見つけだすためには11行も読まなければならないのです。さらに私は認めざるを得ません。私はいささかデリケートな想像力を持っていること、ヨブの名前を、その周囲を取り囲むいやらしいものごとを思い浮かべることなく聞くことはできないものですから、清潔であるべきみやびな人物がヨブに譬えられることに我慢できない、ということ。実際この題材は美の女神には全く対立する何かをもっていますから、画家たちに感興を与えたものが、かれらにはこの題材についての絵を描こうという欲求を決して与えなかったのです。少なくともラファエロもティツィアーノもプッサンも描いていないということを知っています。でもユラニーのソネに関しては非常に美しいということ、もしこの世にロングヴィル公爵夫人と同じくらい美しい体と心、魂の美德を持った女性がいて、誰かが想いを寄せるというようなことがあったとしたら、その人には情熱を伝えるためにこの詩を利用したらどうかとすすめるつもりだということをお認めます。」(Picard, p.211.)

スキュデリーはシャプランから兄ジョルジュにあてた書簡に言及するが、シャプランの書簡集はあいにく1641年から1658年の分が失われている。ロングヴィル公爵夫人に同調して、ヨブが想像させる悲惨さが美の表現にそぐわない

とする。ヴォワチュール支持というよりもロングヴィル公爵夫人頌と言うべきか。

サラザンはバンスラードの14行を4行からなる各連の最終行に折り込んだ56行の注釈を書いてエスプリをからかう。拙訳にはバンスラードの引用に対応する部分に下線を添える。

Glose sur le Sonnet de Benserade à M. Esprit

Monsieur Esprit, de l'Oratoire,
Vous agissez en homme saint
De couronner avecque gloire
Job de mille tourments atteint.

L'ombre de Voiture en fait bruit,
Et s'étant enfin résolue
De vous aller voir cette nuit,
Vous rendra sa douleur connue.

C'est une assez fâcheuse vue,
La nuit qu'une Ombre qui se plaint ;
Votre esprit craint cette venue,
Et raisonnablement il craint.

Pour l'apaiser, d'un ton fort doux
Dites : j'ai fait une bévue,
Et je vous conjure à genoux
Que vous n'en soyez point émue.

Mettez, mettez votre bonnet,
Répondra l'Ombre, et sans berlue
Examinez ce beau sonnet,
Vous verrez sa misère nue.

Diriez-vous, voyant Job malade,

Et Benserade en son beau teint,
Ces vers sont faits pour Benserade,
Il s'est lui-meme ici dépeint.

Quoi, vous tremblez, Monsieur Esprit,
Avez-vous peur que je vous tue?
De Voiture, qui vous chérit,
Accoutumez-vous à la vue.

Qu'ai-je dit qui vous peut surprendre,
Et faire pâlir votre teint?
Et que deviez-vous moins attendre
D'un homme qui souffre et se pleint?

Un auteur qui dans son écrit,
Comme moi, reçoit une offense,
Souffre plus que Job ne souffrit,
Bien qu'il eût d'extrêmes souffrances.

Avec mes vers une autre fois
Ne mettez plus dans vos balances
Des vers, où sur des palefrois,
On voit aller des patiences.

L'Herty, le roi des gens qu'on lie,
En son temps aurait dit cela ;
Ne poussez pas votre folie
Plus loin que la sienne n'alla.

Alors l'Ombre vous quittera
Pour aller voir tous vos semblables,
Et puis chaque Job vous dira
S'il souffrit des maux incroyables,

Mais à propos, hier au Parnasse
 Des sonnets Phébus se mêla,
 Et l'on dit que de bonne grâce
Il s'en pleignit, il en parla.

J'aime les vers des Uranins,
 Dit-il, mais je me donne aux diables,
 Si pour les vers des Jobelins,
J'en connais de plus misérable.
 (Picard, p. 202-204.)

「エスプリ氏に寄せるバンスラードのソネ注釈

オラトリオ会のエスプリ殿、あなたは聖人として行動される、千もの苦難にあつたヨブに栄光と冠を与えるために。

ヴォワチュールの影が音をたて、そして今夜ついにあなたにお目にかかるかと決心し、あなたに自らの苦しみを知らしめましょう。

それ見るのはかなり腹立たしいものでしょう、嘆く影の夜は。あなたの心(エスプリ)はその到来を恐れ、正しくも、危惧するのです。

それを静めるために甘い声でお言いなさい、私はへまをやらかした、跪いて懇願します、あなたが心を動かされないように、と。

影は答えましょう。帽子をかぶりなされ、勘違いなさらずこの美しいソネを吟味なさい。あなたはあの裸の苦痛をご覧になりましょう。

病んだヨブ、そして美しい肌のバンスラードを見ながら、あなたは思われたかもしれない、これらの詩句はバンスラードのために書かれたのだ、そこに自らの姿を描いたのだ、と。

おや震えていらっしゃるかエスプリ殿。私があなただを殺すと怖れていらっしゃるか。あなたを大事に思っているヴォワチュールをご覧になることにお慣れください。

あなたの意表をつき肌を青ざめさせるような何を私は申しましたでしょう。そしてあなたは苦しみ嘆く男に何を期待せずにおられるべきでだったでしょうか。

私のように、書いたものに対して攻撃を受けた作者はヨブが苦しむ以上に苦しむのですよ、(ヨブは) 極度の苦しみを味わってはいるのですが。

もはやもう一度秤にかけられませぬよう、私の詩句を一方に、儀仗馬にのっ

た忍耐が続くのが見える詩句を他方に。

縛り付けられた人々の王である例の Herty はその頃こう言ったでしょうに、あなたの狂気をお進めになりませんように、自らのそれより先まで。

その時影はあなたと同意見のみなさまに会いに行くためにあなたを離れ、そしてヨブは、あなたに彼が信じがたい痛みに苦しんでいるかどうか告げることでしよう。

でもところで昨日パルナソスの山ではポイボスがこれらのソネットに介入し、喜んで、嘆き、語った、ということです。

私はユラニー派の詩句が好みです。しかし悪魔に身を投げ渡そう、ヨブ派の詩句を推す私よりみじめな奴を知るならば、とのこと。」

サラザンはヴォワチュールの死後 *La Pompe funèbre de Voiture* を書くのだが、生前のヴォワチュールとはそれほど関わってはいない。1642年春、ガストン・ドルレアンに従って南フランスにいたヴォワチュールは、パリからの伝言をもたらししたサラザンとアヴィニョンで出会っている。²⁰⁾

Herty はこの時代の有名な狂人。パリの精神病院 Petites-Maisons に閉じこめられていた。ヴォワチュールがこの人物と話しに言ったことがある、とタルマン・デ・レオは伝えている。²¹⁾

ポイボスはギリシア神話の光明の神アポロンの呼称だが、ここでは慣用表現から導かれる。Furetière によると、parler phoebus とは「すばらしげなことばづかいで話すよう装いながら難解さや曖昧さに陥る」の意である。モリエールに『女学者』の中でからかわれる人物としてわれわれには親しい Charles Cotin を、タルマン・ド・レオは「このコタンは立派な Phebus である」と評している。²²⁾

ヴォワチュールに慣れたわれわれとしては、『ヨブ』を折り込みながら愉快地にヴォワチュールを支持するサラザンの筆遣いの方が、次に見るヨブ支持の凡庸な数点より好ましく感じるのだが。

4) Jobelins

ユラニー派は多くはないが、と言ってヨブ支持が絶対的に多いわけでもな

20) Ubicini, I, p. 369.

21) *Historiettes*, I, p. 493.

22) *Historiettes*, II, p. 679.

い。

まずは無名氏の例。

Epigramme

Des sonnets que (dont) l'on dispute

Job l'emporte tout net

Si l'on veut de haute lutte

Qu'un seul vers soit un sonnet. (Lachèvre, II, p. 542., Picard, p. 208., 1 行
目のかっこ内は Lachèvre による異文。)

「風刺詩

人々が争うソネットの内、ヨブがはっきり勝っている、無理矢理にたった一行
がソネットとこじつきたいならば。」

これもヨブ派に入れるべきだろうか？ ヨブが勝っていると言うのだが、1
行だけでソネットだと力づくでしたいのなら、という保留付きではヨブに対して
全面的な賛辞を送っているとは読めない。無名氏のいう1行は、ロングヴィル
公爵夫人やスキュデリー嬢が指摘する唯一みやびな最終行を指すだろうから、
本音はむしろユラニー支持か。

L'agé の署名による『ヨブ』の敷衍。

Sur les Sonnets de Job et d'Uranie, Sonnet

Hélas ! de quoi s'avise-t-on,

Après plus de trois mille années,

D'aller plaindre d'un vieux barbon

Les disgrâces inopinées?

Il eut de cruelles journées,

Mais contre les maux il tint bon,

Et de plus douces destinées

Firent reflleurir sa maison.

Vous qui plaignez ce misérable,

Voyez la blessure incurable
Dont Amour frappe mon esprit.

Mes souffrances passent les siennes,
Il vit finir enfin les peines qu'il souffrit
Et je n'espère pas de voir finir les miennes.
(Picard, p. 207.)

「ヨブとユラニーに関するソネット

ああ、みな何を思いついたのだろう、三千年ののちに、老いぼれの思いがけない不幸を嘆こうとは。

老人は過酷な日々を過ごしたが、痛みに耐え、そしてずっと穏やかな宿命が、その家を再び花咲かせた。

この悲惨を嘆かれる方よ、アモールが私の心を打ってできた癒されない傷をご覧ください。

私の苦しみは老人のそれを凌駕し、老人は終いには苦しみが終わるのを見たのだが、私は私の苦しみの終わりをを見ることを期待しない。」

Hercule de Lacger について、タルマン・デ・レオは情熱的な La Suze 伯爵夫人が思いを寄せた相手であると述べている²³⁾。『ヨブ』支持の表明というよりも、『ヨブ』に触発された書き換えの域を出ない。

Ubicini が引用する未刊のマドリガルも『ヨブ』を模倣しながら『ヨブ』支持を表明する。

Permettez, princesse adorable,
Que pour Job je sois aujourd'hui :
Car chacun aime son semblable,
Et je suis, loin de vous, malheureux comme lui.
(Ubicini, II, p. 310.)

23) *Historiettes*, II, p. 109.

「敬愛すべき大公妃よ、私が今日はヨブを支持することをお許してください。というのは、みな自分の同類を好むもので、私はあなたから遠く離れて、彼のように不幸なのですから。」

アレー (Antoine Halley) から Aubert への1649年12月25日付の書簡。

「ヨブの作者は、その頂点において崇高で細やかで、生き生きとしており、鋭く、その作品よりもその発想で自らを感嘆させることに成功した希有な人物です。優れて機知的であり多分大いに尊重するに値するのです。ユラニーのソネは流麗で、壮麗で、むらがなく、芸術の規則に適っており、無理がない、それほど機知もないがより甘美である。端的に言えば美の女神ミューズのことばを良く語っており、もう一方の洗練された魂が感じさせると同じくらい洗練された詩人を感じさせます。そこで、私が非常に評価するヨブの側についても、それによってヨブの陣営はより強化されたということにはならなかったでしょう。なぜなら多くの人が、私が荷担を余儀なくされたヨブに抗して勝利を奪っているのですから。」 (Picard, p. 212.)

アレーは個人詩集がある詩人であるようだが、大したことはわからない。ロングヴィル公爵夫人に『ユラニー』と『ヨブ』のいずれが優れているかきめるよう選ばれ、この問いに決着をつけるためにカーンのアカデミー会員である Le Picard という人物に協力を求めたという²⁴⁾。Aubert は不詳。どういった事情でロングヴィル公爵夫人がこの人物に特に意見を求めたのかわからない。アレー個人はヨブに荷担するというのだが、それでヨブの陣営が強化されたわけでもないという。

ヨブを支持する詩や書簡が圧倒的に多いわけではない。それにそれらの作品は少なからずバンスラードの垂流であって、それ自体として魅力的ではない。ユラニー支持にはロングヴィル公爵夫人やスキュデリー嬢、サラザンといった文学史に名を残した人物を見つけたが、ヨブ派には目立った人物を見出さない。

24) Lachèvre, IV, p. 144.

バルザック

ゲ・ド・バルザックは13章に渡る長大な論文を書いている。量的にも筆者の盛名でも群を抜いたもので、バルザックの論がこの論争に決着をつけ、バルザック以前の論調はバルザックの大きさに隠されてしまうことになる。

論文の冒頭、バルザックは「この二つの詩は分野が違うのだから較べようがない」と留保をつけながらも、「中には Uranie を好む人もいようが、大方は Job を好むだろう」とヨブ支持を表明する。以下各章ごとに要約し、論考を追ってみよう。

第1章では、『ヨブ』支持が多かろうとした後、それぞれの詩を以下のようなことばで表現する。すなわちユラニーは「荘重で (grave)、きらめき (éclat) と力 (force) があって、修辭的 (rhétoricien) かつ教科書的 (plus de l'école) である。月並み (lieu commun) さは月並みならざる方法で (manière peu commune) 描かれ、壮麗で (pompe,) で白昼に (en plein jour)、祝祭の衣裳で (habillement de fête) 現れ、端的には美しい (beau)。対して、ヨブは繊細で (délicat)、心地よく (plus d'agrément)、細やか (plus de finesse) で、器用 (ingénieux) で、会話的 (plus de la conversation) で、月並みさは少なく (moins le lieu commun)、独創的 (plus original)、姿を隠しながら徐々に現し (découvre en se cachant)、暗闇 (obscurité) に乗じ、扮装 (travesti)、ヨブのマスクを着け (masqué) ており、きれいである (joli)。とってきれいが美しいに勝るわけではない、などなど、ロングヴィル家での会話に参加していたらこのように論を組み立てたであろう、と言う。しかしこの論ではそのような議論は取らず、自分の聴罪司祭なる人物に仮託して議論の方向性を示す。すなわち破滅する理由として理性を持ち出すことの不当さと、愛を語るために聖人の名を使うことの不当さを断罪することである。そして最終的な結論は、この論争への問いかけ、Lequel des deux Sonnets aimeriez-vous mieux avoir fait? には²⁵⁾、いずれも選べないだろうと論の展開を予告する。

第2章では『ユラニー』の誕生の瞬間に立ち会ったことを報告する。そしてバルザック自身とマレルブがこの作品を評価したと伝えている。ところが今は『ユラニー』にかつての美しさは感じられない、なぜなら、前半と後半が同質

25) バルザックによってイタリック体で引用されるこの課題は、コンチ大公かロングヴィル公爵夫人の問いかけなのだろう。コルネイユのソンネ *Deux sonnets partagent la ville* もこの問いかけに答えている。

ではなく、前半は後半にふさわしくない。前半の中の最良の3行の中にも矛盾がある。殉教を讃えるとしながら不平を述べない、というのが、殉教と不平は並び立たない。レトリックにおぼれて精神性が曇ったと結論する。

第3章では、かつての評価は初見の印象であって新奇さのために評価した、とかつての高い評価を自らうち消すことから始める。後半6行は立派に見えたが、重大な欠陥がある。自由を求めての正当な戦いを *révolte* (反抗) という語で呼ぶのは、表現に引きずられてことばの価値で判断していない、とする。

第4章、第5章、第6章では、11行から13行について論じる。「ユラニーだけが美しい」と断言するのに理性が「努力する」必要はないだろう。しかし理性にそう言わせるために詩人が努力するのもおかしい。それにユラニーだけということによって他の美しい人たちを除外することになるのだが、もしヴォワチュールの存命中に印刷されていたら、他の多くの自らを美しいと思っている人たちを敵に回しただろう。優越性を表現することばであれば弱者の存在を許容するが、「だけ」ということばは他の存在を許さない。そもそもそのような序列をつける権限を持つものはいないだろう。

第7章は最終行の中性代名詞 *y* が何を指すのか論じる。もし *dans Uranie* であればフランス語としては奇妙な用法である。*dans l'amour d'Uranie* であれば、第1行にかかることになり、遠すぎるだろう。フランス語としてそれほど溯ることが無理なら、*rengager* するのは詩人の内面で想像されている『ユラニー』への隷属という状態かもしれない。いずれにせよ *rengager* が明確にかかることばを持たないのは文法的に正しくなく、詩であっても文法には従わなければならない。

第8章になるといささか難癖は度を越してくる。『ユラニー』への愛のように無償の愛においてあらゆる官能(感覚)は役にたつのか、嗅覚や味覚は貢献しないだろう、と。サラザンの *Phoebus* を暗示する表現も見える。

第9章ではバンスラード批判になる。批判の鋒先はヴォワチュールに対するものほど鋭くはない。*patience* が複数形で使われていることが慣用に反することを指摘する²⁶⁾。

第10章では *vous rendra sa douleur connue* の言い回しの奇妙さを指摘す

26) リトレによると「複数で使われることもある」として、このソネットの例を挙げる。Richeletによると忍耐の意味では複数では用いられない。ただ、この詩の例とバルザックの発言を取り上げて、アカデミーの大人物がこのことばを複数形で使っていると指摘する。

る。

第11章では最初の2連の中の矛盾を指摘する。つまり『ヨブ』に仮託する詩人は、思いを寄せる奥方が自分の苦しみに心を動かされないのではないかと心配する一方で、苦しむ姿を見ることに奥方が慣れることをも要求もする。見ることに慣れてしまえばそれは感動を引き起こす力を失うのだから。

第12章では裸の苦痛について論じる。裸のしかも苦しんだ肉体は女性の目にさらすべきものではないとする。この部分はロングヴィル公爵夫人やスキュデリ嬢の意見を参照しているか。

第13章では9行めと12行めの *avoir d'extrêmes souffrances* と *avoir des peines incroyables* について批判する。これらは同内容の無意味な繰り返しである上に、それぞれ文法的に不備である。すなわち *souffrir extrêmement* の意を述べるために前者の表現を取るの粗野な言い方である。また *peine* は *difficulté* や *travail* の意味でもあるので、苦しみの意味であれば、正確に *souffrir des peines* と言うべきだとする。

第13章の途中で論文は唐突に終わる。この章の最終段落がこの論文全体の結語になっている。dissertation の統合的な結論は与えない。二つのソネットいずれかへのバルザック個人の最終判定も下さない。この議論自体が細かい文法問題に拘泥することになっており、小さなこと、遊びに長々と時間を費やすべきではないと自己反省する。いささか肩すかし気味の唐突な終幕である。

なぜ結論をまとめずに唐突に終わるのだろうか。論争熱が唐突に冷まされでもしたのか。われわれはこの論文の執筆時期を知らないが、最後の文を信じるならばこの論文の執筆には1月を費やしている。1月の長さで唐突な終了は、われわれが想定する1549年12月から50年1月なかばという論争期間と、コンデ大公たちとロングヴィル公爵夫人の1月18日の身柄拘束とパリ退去との関わりを想像させる。バルザックはアングレーム近郊のバルザックに隠遁して、パリと書簡を頻繁にやりとりしていた。この論文も一気呵成に書き上げられたのではなく断片ごとに提示されたような文体である。13の断片に1月の時間をかけるゆったりとした議論の展開と唐突な幕切れは、ロングヴィル公爵夫人たちの状況を反映しているか。コンデ大公らの逮捕とロングヴィル公爵夫人のパリ退去が、論文に結論を下す時間的余裕を与えなかったのかもしれない。

論文の配分は、バルザックはヴォワチュール批判にいささか多くを割いていないか。二つのソネットの評価を対比し、議論の方向を予告する第1章を除いて、2から8の7章がヴォワチュールに対する批評、9から13の5章がバンスラー

ド批評を述べる。20年以上前に書かれた『ユラニー』は、最近書かれた『ヨブ』に対抗して引っぱり出されたいわば当馬なので、論争は評価の定まった『ユラニー』よりも、『ヨブ』評価をめぐる戦わされてきた。ところが、なぜ『ユラニー』批判の割合が多いのだろうか。バルザックの美意識の公正な判定によるものだろうか。バルザックの心境は、はたして公正中立だったのだろうか。われわれはバルザックとヴォワチュールの関係が冷ややかであったことを知っている。1639年春、アリオストの *I Suppositi* の評価についてシャプランとヴォワチュールの意見が対立した際、バルザックはシャプランに判断を委ねられ、シャプラン有利の判定を下す。この時の判定は純粹に文学的な美意識の差異を反映したものというよりも、リシュリユールを始めとする貴顕がヴォワチュールに寵愛を与えたことへの反発を窺わせる²⁷⁾。当代一の散文の名手というバルザックの矜持を揺さぶったヴォワチュールへの反発もあったに違いない。ヴォワチュールは、ランブイエ邸の人気を集めていたとはいえ、生前は詩も書簡もほとんど刊行していない。ヴォワチュールの死の直後から、ヴォワチュールの作品、書簡は編集され、印刷され、公刊されようとしている。ヴォワチュールの作品集の公刊は、書簡作家の第一人者という地位を、バルザックからヴォワチュールに決定的に移すだろう。ヴォワチュールの作品を擁護する Costar とバルザックを黒幕とする Girac の代理論争がこの後始まる²⁸⁾。

論文そのものとしてこの論はどうだろう。教えられる部分が多いのだが、バルザックの自己反省にもあるように、細かに過ぎる文法的論点に拘泥していること、それでいて唐突に終わったために最終的な結論、歌合わせの優劣は明確ではないことなど、構成に問題がある。最終章の最後の一段落で唐突に「小さなことで愉しみすぎることになりはしないかと心配しています。遊びを仕事にしてしまうかもしれません。そんなに真面目にそんなに長々と遊ぶべきではないでしょう」と勝手に結論づけられてはここまで従ってきた読者としては不満が残る。

むすび

以上、同時代の資料からユラニー、ヨブ論争を検証し、以下を確認した。

Adam は、ユラニー派はロングヴィル夫人一人で弟のコンチ大公以下大部分

27) 田島「ヴォワチュールをめぐる論争」参照。

28) 田島「ヴォワチュールが語る1938年のイタリア」、89ページ注4参照。

がヨブ派だったとするのだが、必ずしもヨブ派の圧倒的な勝利ではない。もっとも、ヨブ派が多いかのように思われるのは当然だろう。『ユラニー』は『ヨブ』に対抗するために引き合いに出されたのだから、『ユラニー』の評価をめぐる論争なのではなく『ヨブ』をどう評価するかという論争なのである。

論争には時代が影を落としている。後代の知識から言えば、フロンドの争乱はまだ終息していない。対立の火種がもう一度火を噴くことをわれわれは知っている。文芸上の論争とはいえ議論の白熱が新たな対立のきっかけになりはしないかと心配する論争の参加者の多くは、旗幟を鮮明にしなかった。フロンドの時期だからこそ議論は盛り上がったと言えるか？フロンドがなければもっと議論は盛り上がったのだろうか。

バルザックの影響力の大きさと、論文の長さが、われわれにヨブ論争をユラニー論争と見せてしまったのではないか。ヴォワチュールを快く思わないバルザックにとっては『ヨブ』よりも『ユラニー』のほうが批判の対象である。論点は些末に走っているとはいえ、長大な論文をバルザックが残し、まとまった文献としてはそれが唯一で最大のものなのだから、この論文が後代の評価を方向付けることになるだろう。「ユラニーを評価する人がいるだろうが、全体としてはヨブのそれを好むだろう」というバルザックの予告は、時を経ると事実として受け止められるようになってしまったのではあるまいか。偉大な作者が同時代の群小作家たちを闇に葬りさるのはわれわれにとっては見慣れた光景である。(2002年9月19日)

書誌

ADAM (Antoine), *Histoire de la littérature française au XVII^e siècle*, 5 vols., Paris, Del Duca, 1962.

ADAM (Antoine), *Littérature française, L'Age classique I, 1624-1660*, Paris, Arthaud, 1968.

BALZAC, (Guez de), *Œuvres de Monsieur de Balzac, divisées en deux tomes*, Paris, Louis Billaine, dans la grand'Salle du Palais, à la Palme, et au Grand César, MDCLXV, avec Privilège du Roi, (Genève, Slatkine, 1971).

BEAUMARCHAIS (J.-P. de), *Dictionnaire des littérature de la langue française*, Paris, Bordas, 1984.

BRUNEL (Pierre), *Dictionnaire des mythes littéraires, sous la direction de Pierre Brunel*, Paris, Editions du Rocher, 1988.

- CORNEILLE (Pierre), *Œuvres complètes, II*, textes établis, présentés et annotés par Georges Couton, Paris, Gallimard, 1984, (Bibliothèque de la Pléiade)
- DIDIER (Béatrice), *Dictionnaire universel des littératures*, Paris, PUF, 1994.
- GENETIOT (Alain), *Poétique du loisir mondain, de Voiture à La Fontaine*, Paris, Honoré Champion, 1997.
- LACHEVRE (Frrédéric), *Bibliographie des recueils collectifs de poésies publiés de 1597 à 1700., donnant: 1 La description et le contenu des recueils; 2 Les pièces de chaque auteur classées dans l'ordre alphabétique du premier vers, précédées d'une notice bio-bibliographique, etc. ; 3 Une table générale des pièces anonymes ou signées d'initiales (titre et premier vers) avec l'indication des noms des auteurs pour celles qui ont pu leur être attribuées ; 4 La reproduction des pièces qui n'ont pas été relevées par les derniers éditeurs des poètes figurant dans les recueils collectifs ; 5 Une table des noms cités dans le textes et le premier vers des pièces des recueils collectifs. Etc. etc.*, Tome deuxième (1636-1661) Recueil de Cardin Besogne, de Louis Chamhoudry, de la Vve Loyson, de Ch. de Sercy, d'Antoine de Sommaville etc., etc. et pièces non relevées par les éditeurs de Chapelle, Charleval, Desportes, Gombauld, Lalane, François Maynard, Montplaisir, Saint-Amant, Saint-Pavin, Sarasin, Théophile, Paris, 1903-1905. (Genève, Slatkine, 1967)
- LAGARDE (Andre) et MICHARD (Laurent), *XVII^e siècle, Les grands auteurs français du programme*, Paris, Bordas, 1982.
- MAGNE, Emile, *Voiture et l'Hôtel de Rambouillet, les années de Gloire 1635-1648*, sixième édition, Paris, Emile-Paul Frères, 1930.
- MAGNE (Emile), *Voiture et les origines de l'Hôtel de Rambouillet (1597-1635)*, Paris, Mercure de France, 1911 (2e édition)
- PICARD (Raymond), *La poésie française de 1640 à 1680, Satire-Epître-Burlesque-Poésie galante*, Paris, Société d'édition d'enseignement supérieur, 1969.
- TALLEMANT DES REAUX (Gédéon), *Historiettes*, 2 vols., édition établie et annotée par Antoine Adam, Gallimard, 1980-1990. (Bibliothèque de la Pléiade)
- VOITURE (Vincent), *Œuvres de Voiture, Lettres et Poésies, nouvelle édition revue en partie sur Manuscrit de Conrard corrigée et augmentée de lettres et pièces inédites, Avec le Commentaire de Tallement des Réaux, Des Eclaircissements et des notes par M. A. Ubicini*, 2 vols., Paris, 1855, (Genève, Slatkine, 1967.)
- VOITURE (Vincent), *Poésies, édition critique publiée par Henri Lafay*, Paris, Didier,

1971.

田島俊郎 「ジュリーへの手紙 —ヴォワチュールの反語—」、『徳島大学教養部紀要 (外国語・外国文学)』第2巻、1991年、183-204頁

田島俊郎 「ヴォワチュールが語る1683年のイタリア」、『言語文化研究 徳島大学総合科学部』第9巻、2002年、87-116頁

田島俊郎 「ヴァンサン・ヴォワチュールをめぐる論争」、『フランス文学』(日本フランス語フランス文学会中国・四国支部)、No.24、2003年(掲載予定)